

令和 6 年 6 月 22 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00151

研究課題名（和文）経典・説話の融合と寺社縁起絵巻の生成 経説絵引の形成を通じた検討

研究課題名（英文）The Fusion of Sutra and Setsuwa Narratives and the Construction of Illustrated Temple Legends: An Examination through the Formation of a visual iconography

研究代表者

山本 聡美（Yamamoto, Satomi）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：00366999

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：寺社縁起絵巻を中心とする中世仏教説話画に描かれたモチーフやその集合体としての図像を「造形語彙」として分節し、それが経典や説話のテキストと結びつくことで意味を生成する構造について明らかにした。具体例として、愛執、闘争、破戒、災厄、監察、鎮魂、発心、廃墟、復興といった意味に結びついた図像を特定し、個々の作例における使用例を抽出することで、寺社縁起絵、高僧伝絵、六道絵、法華経といった主題の違いを超えて共有される造形語彙の機能を明らかにした。さらに、ある図像が、異なる時代や環境において、成立当初とは異なる意味と結びつき解釈が変容する事例にも留意し、図像と意味の動的な関係性を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、六道絵や法華経絵といった主題別に分析されることが多かった中世説話画について、造形語彙の観点から横断的研究を行う視角が開かれた。図像解釈の前提となる経典や説話との結びつきについての知見が蓄積され、従来以上に高い精度での画面理解が可能となった。また、分野横断的な共同研究（特に美術史と文学）を促進すると同時に、国際シンポジウムの主催や共催を通じて日本絵画史研究のグローバル化にも貢献した。さらに、本研究課題に関連した公開講座、一般書の刊行、展覧会の開催も実現することができ、学術成果の社会還元にも努めた。

研究成果の概要（英文）：In this project, I broke down motifs and compositions depicted in medieval narrative paintings, such as illustrated temple legends, into a "visual iconography." I then explored how this visual framework relates to the textual significance of the related sutra and setsuwa narratives. For example, I identified iconographic motifs associated with meanings such as love, war, violation of the Buddhist precepts, disaster, supervision, repose for the departed, spiritual awakening, ruin, and reconstruction. By extracting examples of their use across many individual works, I clarified the function of the pictorial lexicon that is shared across different subjects, such as illustrated temple legends, paintings of the Six Realms, and the Lotus Sutra. In addition, I noted cases in which the interpretation of the "visual iconography" changed, where a composition was associated with multiple meanings due to differing contexts, highlighting the dynamic relationship between image and meaning.

研究分野：美術史

キーワード：日本中世絵画史 仏教説話画 寺社縁起絵巻 六道絵 法華経絵

1. 研究開始当初の背景

寺社縁起絵巻に描かれた図像と経説との結びつきについて、これまで十分な検討がなされてこなかった。その理由として、絵巻は詞書によって内容が明示されているため、描かれたモチーフや場面の意味も、まずは詞書との対応関係で理解できることが考えられる。これに対して本研究課題では、中世寺社縁起の生成には各寺社が掲げる教義や宗教的主張、祀られる神仏や祖師に対する信仰が深く関わっており、経説との結びつきも看過できないと考えた。

寺社縁起の濫觴は、聖武天皇による天平 18 年(746)の勅令に依りて編纂された諸大寺の「伽藍縁起并流記資財帳」に遡るが、ここに記された縁起は、律令制下の朝廷によって管理されたいわば国家公認の寺院史であった。一方、平安時代後半に至ると、律令制に基づく古代国家が変質することに伴い寺社が新たな財政基盤としての荘園経営に乗り出し、12 世紀には広大な荘園を有する領主として再生を遂げていく中で、各地域に伝わる霊験譚や奇跡譚をふんだんに盛り込んだ新たな寺社縁起の形態が生成した。以後、中世を通じて国家的管理の埒外で喧伝され流布した縁起の信憑性を担保したのが、経説の論理に基づく説話の構造、そしてその絵画化であったのではないだろうか。つまり、経説に基づく世界認識や因果応報観が、時・場所・人物といった具体性を加味した説話と融合し、さらには縁起絵巻として可視化されたことで、寺社の由緒や霊験譚としての説得力を獲得していることがうかがわれるのである。以上の問題意識のもと、本研究では、図像解釈の方法を用いて、経説と説話画融合した寺社縁起絵巻の構造と機能を検証した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中世寺社縁起絵巻における経説由来の図像を分析し、経典と説話の融合によって形づくられる縁起の構造を解明することにある。寺社縁起絵巻には、本尊やその霊験を表す場合だけに限らず、一見すると経典との関係が不明瞭な場面に経説が含意されている場合がある。各作例で参照された可能性のある経典や、図像解釈を明らかにすることで、制作環境における教義理解や宗教的立場が浮き彫りとなる。さらに、本研究では分析を効果的に進めるための方法として、次の手順で「経説絵引」の形成に取り組む。寺社縁起絵巻から経説との結びつきが認められるモチーフや場面を抽出、典拠となった経典や儀軌を特定、そこから導かれる図像解釈を検討、インデックスとしての描き起こし図を作成(フォトショップを用いたデジタル描き起こし) 以上の情報を紐づけした画像データベース(経説絵引)を構築。「経説絵引」を活用することで作品間の横断的な分析を円滑化するとともに、造形語彙典典とも言うべき新たな研究ツール開発の基盤整備を目指した。

3. 研究の方法

本研究では、寺社縁起絵巻における経説の利用という新たな視点を加味し、1970 年代以降半世紀の間に蓄積された画像情報やテキストデータを用いて、中世寺社縁起絵巻の体系的把握の再構築を目指した。特に近年、美術館・博物館・図書館・大学などで公開が進む作品・史料のデジタル画像、国内の所蔵品データベースを横断的に検索できるジャパンサーチ(jpsearch.go.jp)を有効活用した。さらに、SAT 大正新脩大蔵経テキストデータベースおよび大正新脩大蔵経図像データベースの運用によって、経典や白描図像類を横断的に参照した。

以上の研究基盤を活用しつつ、後述する「4. 研究成果」に掲げた作品(17 件)について、(1)熟覧調査・撮影、(2)画像データを用いた「経説絵引」作成を行った。

(1)熟覧調査・撮影

研究代表者が過去に調査を実施した作品、また高精細画像に基づく図版が書籍やウェブ上で公開されている作品については、新たな調査・撮影を実施せず、既存の画像に基づく分析を行った。それ以外の作品で、熟覧調査を実施した作品については後述「4. 研究成果」参照。

(2)「経説絵引」作成

寺社縁起絵巻から経説との結びつきが認められるモチーフや場面を抽出：全場面を精査し、①仏画や仏像、②霊験、③破戒や罪業、④閻魔王庁や六道巡礼、⑤その他と分類して関連するモチーフや場面を抽出した。

典拠経典や儀軌を特定：経典や儀軌の探索には SAT 大正新脩大蔵経テキストデータベースおよび大正新脩大蔵経図像データベースを利用する。上記で抽出したモチーフや場面に関連するキーワードで全文テキストを検索した上で、絵巻制作に際して参照された可能性のある経典を絞り込み、その日本における受容や普及の実態についての専論を踏まえて検討した。

図像解釈を検討：経説を踏まえ、絵巻全体のコンテキストや当該寺社の特質などを踏まえ、最も妥当な解釈を検討した。

画像データベース(経説絵引)作成：フォトショップを用いて分節した各モチーフに、典拠経典や関連文献、画面解説に関する文字情報を紐づけしていく。本研究期間内でのデータベース外部公開は行わないが、将来、より総合的な「経説絵引」として拡充することを視野に入れたプラットフォームの構築を目指した。

4. 研究成果

寺社縁起絵巻を中心とする中世仏教説話画に描かれたモチーフやその集合体としての図像を「造形語彙」として分節し、それが経典や説話のテキストと結びつくことで意味を生成する構造について明らかにした。具体例として、愛執、鬪争、破戒、災厄、監察、鎮魂、発心、廢墟、復興といった意味に結びついた図像を特定し、個々の作例における使用例を抽出することで、寺社縁起絵、高僧伝絵、六道絵、法華経といった主題の違いを超えて共有される造形語彙の機能を明らかにした。さらに、ある図像が、異なる時代や環境において、成立当初とは異なる意味と結びつき解釈が変容する事例にも留意し、図像と意味の動的な関係性を解明した。各年度に実施した作品調査及び成果公開は以下の通り。

2021 年度

1) 作品調査 (6 件)

東京・増上寺蔵『釈氏源流』、早稲田大学図書館蔵『釈氏源流』、滋賀県聖衆来迎寺の聖教・障壁画、智積院蔵「一の谷合戦図屏風」、仁和寺蔵「保元・平治合戦図屏風」、日本大学総合学術情報センター蔵「魔仏一如絵」、海の見える杜美術館「平家物語絵展」(展示調査)。以上の機会に撮影した高精細画像の整理や文字資料の翻刻を行った。これらの作品調査を通じて、高精細画像を蓄積することができた。特に平家物語絵に関連しての調査・研究成果を2022年5月に中世文学学会大会にて口頭発表(予定)、また、はつかいち文化ホールにて一般向けの講演として公開した(2022年5月4日)。

2) シンポジウム/研究会の主催・共催 (3 件)

2022年2月5日早稲田大学高等研究所主催「人新世と人文学」第2回セミナーをオーガナイズした。講演者：鷹野佳世子(獨協大学国際教養学部・特任准教授) 論題：「古典絵画の基盤技法材料、流通、使用」。大学院生や一般の聴衆にも議論を開くことで、中世絵画から得られる古典知を議論し共有する場を構築することができた。2022年3月19日仏教文学学会2020年度12月例会(2022年3月に開催)シンポジウム「六道語りの中世」、発表者：山本聡美・阿部美香(昭和女子大学・講師)・阿部泰郎(龍谷大学・教授)。文学研究者と協力し、聖衆来迎寺蔵「六道絵」(13世紀後半)の制作と使用環境を検討した。中世初頭に成立した仏教説話画に表徴された時代相を、図像分析に加え、関連する唱導資料や文学作品、作品を取り巻く人的ネットワークから検討し、特に天台座主慈円における浄土往生思想・実践と、本作との結びつきを明らかにすることができた。早稲田大学内で『釈氏源流』輪読研究会を継続的に実施した。

2022 年度

1) 作品調査 (7 件)

延暦寺宝物殿にて「光明真言功德絵詞」の調査・撮影(2022年7月17日)、海の見える杜美術館にて「変化あらそひ絵巻」等の調査・撮影(2022年10月2日)、京都国立博物館にて十念寺蔵「仏鬼軍絵巻」「十念寺縁起絵巻」等の調査・撮影(2022年11月4日)、岐阜・法華寺で「十王図」「三十番神図」等の調査・撮影(2022年11月17日)、馬の博物館にて、同館所蔵屏風・絵巻・掛幅全10点の作品調査・撮影(2023年1月19・20日)、金沢文庫にて「金沢実時像」等の調査・撮影(2023年2月4日)、鹿児島県歴史・美術センター黎明館にて「御屏風下絵写」の調査・撮影(2023年3月12日)。以上の機会に撮影した高精細画像の整理や文字資料の翻刻を行った。

2) シンポジウム/研究会の主催・共催・参加 (主要なもの3 件)

中世文学学会春季大会(シンポジウム「中世文学と絵画」)にて、「愛執と鬪争の図像 中世文学と仏教説話画」と題し報告した(2022年5月28日)。5TH SWISS CONGRESS FOR ART HISTORY(スイス美術史学会)にて、JAPAN INSIDE/OUT: A Multi-Perspective, Transcultural, Historiographical, Historical, and Institutional View on Japanese Art Historyにて、Buddhism and Court Art: The Sacred and Secular in Japanese Medieval Artsと題し報告した(2022年6月22日)。文学・美術・芸能を通じた中世日本の廢墟表象に関する研究会の成果報告として、国際シンポジウム「古代・中世日本における廢墟の文化史」を開催した(2023年3月18日)。

2023 年度

最終年度にあたっており、本研究課題を総括し時期研究への展開を促すための作品調査を実施すると同時に、成果報告に注力した。特に、講演、出版、展覧会の開催の形で、研究成果を広く社会に還元することができた。主な活動内容は以下の通り。

1) 作品調査 (4 件)

寛永寺にて「両大師縁起絵巻」調査(2023年5月31日)、静岡・本興寺にて「法華経曼荼羅」及び「紺紙金字法華経」調査(2023年6月7日)、奈良国立博物館にて「法華経曼荼羅」調査(2023年8月8日)、尼崎大覚寺にて唐招提寺関連聖教調査(2023年8月20日)。以上の機会に撮影した高精細画像の整理や文字資料の翻刻を行った。

2) 成果報告(主要なもの6件)

唐招提寺開山忌舍利会記念講演会にて、「中世戒律復興と東征伝絵巻」と題した一般向け公開講座を実施した(2023年6月6日)。説話文学学会大会(六十周年記念大会)にて、「造形語彙集としての『釈氏源流』 日本中世絵巻との接点を探る」と題し報告した(2023年7月1日)。

『増補カラー版 九相図をよむ 朽ちてゆく死体の美術史』(KADOKAWA、2023年7月)刊行。国際学会での成果報告として、JSAA-ICNTJ(豪州日本研究学会)2023にて、Ruins as The Place of Awakeningと題し報告した(2023年9月2日)。世田谷区郷土資料館「館蔵品でみる宗教美術の造形(かたち) - 仏教美術を中心に -」展(2023年10月28日~12月28日)に企画協力し、事前の作品調査、図録への寄稿、関連公開講座を実施した。神奈川県立金沢文庫「特別展 廃墟とイメージ 憧憬、復興、文化の生成の場としての廃墟」展(2023年9月29日~11月26日)に企画協力し、事前の作品調査・撮影および、図録への寄稿、関連クロストークへの登壇を実施した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山本聡美	4. 巻 68
2. 論文標題 吉備真備の才藝と本朝仏神の感応 「吉備大臣入唐絵巻」 の構造	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 774-756
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本聡美	4. 巻 438
2. 論文標題 聖衆来迎寺本「六道絵」と如法経供養の儀礼空間 閻魔堂建築から「閻魔王庁幅」への中世的展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 美術研究	6. 最初と最後の頁 81-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本聡美	4. 巻 118-4
2. 論文標題 愛執と発心：朽ちてゆく死体へのまなざし（特集 身体）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学燈	6. 最初と最後の頁 10-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本聡美	4. 巻 95-2
2. 論文標題 善知識としての：古代日本における仏教美術と疫病	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 121-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本聡美	4. 巻 53-4
2. 論文標題 「鳥獣戯画」乙巻の主題と世界観：動物たちの悪心と報恩（特集 鳥獣戯画の世界）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 123-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本聡美	4. 巻 68
2. 論文標題 愛執と闘争の図像 中世文学と仏教説話画（シンポジウム 中世文学と絵画）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中世文学	6. 最初と最後の頁 中世文学
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 8件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 修羅と鎮魂の六道語り
3. 学会等名 海の見える杜美術館「平家物語絵」展記念講演会「描かれた平家物語」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 愛執と闘争の図像 中世文学と仏教説話画
3. 学会等名 中世文学会春季大会 シンポジウム「中世文学と絵画」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 Buddhism and Court Art: The Sacred and Secular in Japanese Medieval Arts
3. 学会等名 5TH SWISS CONGRESS FOR ART HISTORY (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 善知識としての災厄 仏教美術と疫病
3. 学会等名 朝鮮大学校 災難人文学研究事業団 《東アジアの災難に関する研究ネットワーク構築事業 / 国内外優秀学者特別講演》(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 軍記と女性 建礼門院六道語りと中世合戦図
3. 学会等名 総合女性史学会2022年度大会 危機・ジェンダー・表象の歴史学 描く女 / 描かれる女 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 図像の生命誌 意味と形のあわい
3. 学会等名 名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター「宗教遺産をめぐる真正性 宗教遺産テキスト学の発展的展開」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 境界性の図像 九相図に表現される、あわい
3. 学会等名 京都文教大学臨床物語学研究中心公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 横川靈山院の六道絵 『往生要集』からの飛躍
3. 学会等名 仏教文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 愛執の図像学 中世説話画に描かれた愛と発心
3. 学会等名 二松学舎大学人文学会第123回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 中世戒律復興と東征伝絵巻
3. 学会等名 唐招提寺開山忌舍利会記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 造形語彙集としての『釈氏源流』 日本中世絵巻との接点を探る
3. 学会等名 説話文学学会大会（六十周年記念大会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 監察するほとけ 中世閻魔信仰の嚆矢としての鳥羽炎魔天堂
3. 学会等名 日本仏教総合研究学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 Ruins as The Place of Awakening
3. 学会等名 JSAA-ICNTJ（豪州日本研究学会）2023（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 発心の場としての廃墟 三車火宅の図像学
3. 学会等名 佛教史學會（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 諏訪敦、鎌田享、山本聡美、渡辺晋輔、鈴木理策、小池寿子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 美術出版社	5. 総ページ数 184
3. 書名 諏訪敦作品集「眼窩裏の火事」	

1. 著者名 木俣元一, 近本謙介編/宮治昭, 上枝いづみ, 影山悦子, 檜山智美, 濱田瑞美, 森雅秀, 大谷由香, 荒見泰史, 程永超, 横内裕人, 三好俊徳, 富島義幸, 本井牧子, 児島大輔, 猪瀬千尋, 山本聡美, 鷹野佳世子他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 698
3. 書名 宗教遺産テキスト学の創成	

1. 著者名 山本聡美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 395
3. 書名 増補カラー版 九相図をよむ 朽ちてゆく死体の美術史	

1. 著者名 梅沢恵、渡邊裕美子、陣野英則、山本聡美、木下華子、堀川貴司、山中玲子、佐藤直樹、貫井裕恵、三輪眞嗣、櫻井唯、板倉聖哲	4. 発行年 2023年
2. 出版社 神奈川県立金沢文庫	5. 総ページ数 127
3. 書名 廃墟とイメージ 憧憬、復興、文化の生成の場としての廃墟	

1. 著者名 左海きは、高岸輝、山本聡美、竹崎宏基	4. 発行年 2023年
2. 出版社 高松市歴史資料館	5. 総ページ数 56
3. 書名 万物流転 語られるイメージと時間	

1. 著者名 宮治昭、肥田路美、板倉聖哲、浅井和春、岩佐光晴、佐藤有希子、安藤佳香、向井佑介、泉武夫、津田徹英、山本聡美、佐々木守俊、古川攝一、藤元裕二、高橋範子、西山美香、浅湊毅、森雅秀、上嶋悟史、中野慎之	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 693
3. 書名 アジア仏教美術論集 東アジア (アジアの中の日本)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際シンポジウム「古代・中世日本における廃墟の文化史」	開催年 2023年～2023年
---------------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	INALCO			
スイス	University of Zurich			
韓国	国立中央博物館	高麗大学		
ドイツ	Heidelberg University			
米国	Harvard University	Columbia University		